



吉本隆明全著作集(続)

10

思想論  
Ⅱ

勁草書房

吉本隆明全著作集(続) 10

昭和五三年 四月三〇日第一刷発行

著 者 吉本隆明

発行者 井村寿二

発行所 勁草書房

〔東京都文京区後楽二の二三の一五

電話番号 東京八一四局六八六一

郵便番号 一一二

振替口座東京五一七五二五三番〕

印刷所 浩文社

製本所 青木製本

\* 定価は外函に表示してあります。

©1978 by Takasaki Yoshimoto

落丁・乱丁本はおとりかえします  
無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます

0390-888800-1836

# 目 次

全著作集(統)のための序……………三

第I部……………七

情 況……………九

収拾の論理……………一〇

基準の論理……………二九

機能的論理の限界……………四〇

機能的論理の位相……………六六

機能的論理の彼岸……………六六

非芸術の論理……………一〇一

修景の論理……………一二六

畸型の論理……………一三三

倒錯の論理……………一四九

集落の論理……………一六六

異族の論理……………一八八

芸能の論理……………二〇四

あとがき……………二四四

|     |    |
|-----|----|
| 第Ⅱ部 | 三六 |
|-----|----|

|        |    |
|--------|----|
| 情況への発言 | 三九 |
|--------|----|

一九六九年八月～一九七八年一月

|    |    |
|----|----|
| 解題 | 四七 |
|----|----|

# 思想論Ⅱ

吉本隆明全著作集〔続〕

10



## 全著作集(続)のための序

『情況』という本をまとめてから以後に、現状の動きについてまとめた考えを書きつけることが出来なくなってしまった。ひとつには個別的な課題のそれぞれに深入りしてしまったためである。またもうひとつにはわたし自身が刻々と流動する立脚点に足を踏まえて現実のための、現実についての考察を深化してゆくという場面を、外部からも内部からも喪失するという状態になったということもある。もともとわたしの資質にも現状認識にも世界の全体を自分の外に置く、あるいは世界の全体から自分が外に置かれるということを自明の前提のように受容するものがあつた。このことは主観的には苦痛でも不満でもなかった。また不自由でもなかったといつていい。自立した表現者としても振舞えず、さりとて政治的な現状にも就かずに中途半端な思想を披瀝するなどということもともと性にあわない。けだし歳月は本性上、耳目を驚かす出来ごとを運んでくれるわけではない。徐々に隠微にわたし自身をもわたしの外に置かれた世界をも衰退せしめてゆく過程であつた。この間もとても巨大な現実的な根拠のある惨劇はもともとひそかに諸個人の内面で起つたことは間違いない。このような惨劇がじぶんやじぶんたちに無縁だと称する諸個人も諸党派もありうるだろう。いなむしろこの間こそが〈天上〉への接近だと称する諸傾向はあるにちがいない。けれどもそのような諸傾向や諸世代もまた衰退してゆく情況の現象であることを免れない。という意味はいたん積極的な自己主張に転じようとした途端に、諸傾向はまた仮象あるいは表象として世界に浮上

してしまふ現象にすぎなくなるということである。

後退し衰弱してゆく時代という認識は、わたくしがじぶんを世界の外に置いてゐるかぎり、永續する視野にすぎない。その意味では不斷の憤懣というのとおなじで何らの積極的な意義をもち得ないとも云える。そこでわたくしは情況の現在という諸問題とわたくし自身の立脚点の自己同一性に映る永續的な疎遠さとを無理にも分離しようとする意図を、じぶんに課した。いいかえればこの間に〈建設的〉な仕事にも力を注がざるを得なかった。〈建設的〉な諸仕事、諸考察にはいつも労力の感じがつきまとうものである。これはわたくし自身を寂しくも感じさせたり、正直にいつて少しは人並みの業績もあげたなという実感も伴った。これは〈書く〉ということは世界にたいする負債であるという後めたい感じとかなりいい加減な自持との葛藤に終始することであつたといつてよい。

『情況』以後の情況についてのわたくしの発言は、走り書き程度に、そのような速さで寸暇を使つてわたくしに関する諸批判に応ずる形に限定しつゝなされた。そこに流れてゐる主調音と不協和感との交響と不交響とはこの間のわたくしの心音、その葛藤のようなものをもっともよく伝えてゐるのではないかと思う。そこに提示した断片的な見解の考察に積極的な意義を附与しようとはつゆ思わぬ。むしろ情況にたいする自己防護の支えという意味しかじぶんでも与えてはいない。もっと正面に、もっと正面から、もっと根柢的という声をたえずじぶんに云いつづけたが果せないままに現在まできてゐる。

厳密にいつて、世界の外に置かれ、あるいは世界を自分の外に置いたひとりの表現者が、存在する根柢を世界の現実にたいして持ちうるとすれば、現実の情況はなお判断を超えないという識知に基いてゐる。現実にたいする新たな認識の深化と生々とした好奇心とに形を与えるための研鑽、こ

れこそが先に持越される課題である。

昭和五三年二月十日記

吉  
本  
隆  
明



# 第 I 部



情

況

## 収拾の論理

私がいうのは、おそろしく「抽象的」な術語や象徴をつかいながら、「具体的」には街頭や集会ですぐ肉体的に激突するような傾向、(笑)或いは、実現可能性からいえば、いろんな時間的な幅をもっている闘争目標が、すべて資本主義社会における疎外の回復といった雄大な目標に目盛がセットされ、その結果、絶対革命主義が結果としては絶対現状維持になっちゃうような傾向ですね。なぜそういう純粹主義が受けるか、という問題です。もちろん、こういう「抽象派」あるいは「具象派」(笑)が輩出したのは、前にも論じられましたように、伝統マルクス主義ないしは前衛神話の崩壊という歴史的背景があるわけです。ただもう少し微視的に個々人を見てみると、こういうラディカルは政治的ラディカルというより、自分の精神に傷を負った心理的ラディカルが多いですね。その心の傷は、ある場合には党生活のなかでの個人的経験に根ざしているし、ある場合には戦中派の自己憎悪に発しているし、ある場合は、俺は一流大学を出て本来は大学教授(?)とか、もっと「プレステイジ」のある地位につく能力をもちながら、「しがない」「評論家」や「編集者」になっているという、自信と自己輕蔑のいりまじった心理に発している。学生の場合

合は、現代の、とくに大都会でマス・プロ教育を受ける環境に当然ひろがる疎外感と孤独感が下地になっているでしょう。

（『現代日本の革新思想』丸山真男の発言より）

ほぼ三年ほどまえ、かけあい漫才よろしく、談笑のうちに丸山真男にこう規定された「純粹主義」の学生の末裔たちは、丸山真男の属する東大法学部の学館になだれこみ、丸山真男を研究室から追いだした。新聞の報道では、丸山真男は封鎖する学生たちの群れにむかって、再三「肉体的に激突」（？）をくりかえし、へ君たちのような暴挙はナチスも日本の軍国主義もやらなかった。わたしは君たちを憎みはしない、ただ軽蔑するだけだ」といったことを口走った。学生たちはへわれわれはあんたのような教授を追い出すためにきたのだ」とこたえた。

そこでこんどは、三年まえに、丸山真男によって「俺は一流大学を出て本来は大学教授（？）とか、もっと『プレスティジ』のある地位につく能力をもちながら、『しがない』『評論家』になっているという『自信』と『自己軽蔑』のいりまじった心理から『純粹主義』に走った、と失笑に値いする言葉で勘ぐられたものが、口をひらく番である。

丸山真男は「街頭」や「集会」や大学構内で、「すぐ肉体的に激突するような傾向」が、けっして「純粹主義」や「しがない」「評論家」の特性ではなく、人間の社会的な存在の仕方が、ある局面で強いられる本来的な行動様式のひとつであることを、こんどはかれ自身の行為によって、身をもって立証したのだ。しかし丸山は「肉体的に激突」した瞬間にも、しがない評論家とちがって、「大学教授」が社会的に「プレスティジ」のある地位だ、という無意識の錯覚からは、自由ではな